倫風宏話

苦難を脱する唯一の道

上廣榮治

日本の社会が沈滞の淵に沈んでから、早くも十年の歳月が過ぎ去ろうとしています。景気は三年で回復する、いや五年はかかるだろうという類の予測はすべて外れてしまいました。

皆様の中にも、苦難福門とはいえ苦難が長すぎるのではないか、という疑念を持ち始めている方もおられるかもしれません。特に自営業の方々には、そうした思いが強いのではないかと拝察いたします。

しかし、苦しい時期だからこそ、信念をますます堅固なものとし、生活改善の工夫をいよいよ逞しくして、働くを喜ぶ実践にさらに邁進していただきたいと思います。それだけが苦難を脱する唯一の道だからであります。

苦境の中の十年といえば、昭和二十九年を思い出します。日本が焦土と化し、国民がすべてを失った時から数えて十年目の年です。そこでこの年を調べてみますと、なぜかこの年には、長い苦難の時期を耐えて、営々と続けられた努力が、数多く実を結んでいることがわかりました。

例えば、この年に黒澤明監督の『七人の侍』が封切られています。あれから半世紀近くたった今も、

日本映画ベスト一〇〇などを選ぶアンケートでは、常に二位を大きく引き離してトップにくるという名作です。それから六年後、『七人の侍』はアメリカのジョン・スタージェス監督によって『荒野の七人』としてリメイクされました。

文学の世界では、山本周五郎の名作『樅ノ木は残った』が、やはり昭和二十九年に世に出ています。こちらも時代小説のベストテンには必ず登場する傑作です。ふつう、作家が亡くなってしばらくすると、その著書が書店の棚から姿を消していくものですが、周五郎作品の場合には、没後三十数年を経た今も文庫本となって、どこの書店にも並んでいます。

この他、映画でいえば、木下恵介監督の『二十四の瞳』や、数年前にアメリカでリメイクされた『ゴジラ』などもこの年の公開です。

しかし、それにしてもなぜ昭和二十九年という年に、長く人々に感動を与え続ける作品が数多く登場したのでしょうか。いくつかの理由が考えられそうです。そしてそれらの理由は、今日の私たちにとって役に立つ教訓を含んでいるように思われます。

まず、これらの作品はいずれも、苦難の時代を描いています。『七人の侍』は、毎年野武士の略奪に苦しんでいる農民を七人の侍が死を賭して助けるという話です。『樅ノ木は残った』は、幕府による伊達藩取りつぶしの陰謀から、なんとか藩を救おうと腐心し、ついに権力者の凶刃に倒れる原田甲斐の忍従と闘いの物語です。『二十四の瞳』は、小豆島の女先生と十二人の子どもたちが、貧しさや戦争に翻弄されながらも健気に生きていく物語です。そして『ゴジラ』は、核実験によって目覚めた怪獣が東京を襲う話です。どの物語も、苦難や災害に際しては、希望を持ち未来を信じて前向きに立ち向かわねばならないのだと教えています。逃げてはならない、信念を固く保てと教えてくれます。

戦中・戦後の苦難の時を生き抜いて、やっと前途に曙光を見ることができるようになった当時の人々は、自分たちの経験に照らして、こうした呼びかけに強く胸を打たれたに違いありません。

しかし、苦難に立ち向かったのは、作品の中の登場人物たちばかりではありません。それぞれの作者自身が、苦難に負けず強い信念を貫き通した結果、完成した作品ばかりなのです。

『七人の侍』は、黒澤監督の入院、予算オーバー、撮影の期限切れ、会社倒産の危機などによって、何度も中断を余儀なくされています。ただただ監督の「よい映画を創ろう」「よい映画は理解される」という信念と意欲と努力だけで、なんとか完成にこぎつけたものです。

山本周五郎という作家も、不遇時代の長い人でした。時代の流行に見向きもしないで、人間真実を一点一画もおろそかにしないで描き切ろうとする周五郎は、いわゆる「売れない作家」だったのです。しかし彼は、そうした不遇の中にあっても信念を曲げることなく、己の信じるところを貫いて微動だにしませんでした。戦中も戦後も、時流におもねることを断固として拒否し清貧に甘んじて、後世珠玉のように愛されることになる作品を書き続けていたのです。

いずれも、長い不遇や四面楚歌の状況を撥ね返して、努力に努力を重ねた末に完成したものであればこそ、半世紀近くを経た今も少しも色褪せることのない確かな光芒を放ち続けているのです。もし、彼らが時の苦難に負けて、安易な妥協や逃避に走っていたとしたら、私たちはこれら後世にまで残る財産を持つことはできなかったのです。

そして、私たちの実践についても同じことがいえるでしょう。私たちが今の苦難を過大に考え、信念をぐらつかせ、実践を怯むとするならば、明日の福門が開かれることはありえません。私たち自身の明日が開かれないばかりではなく、私たちの子や孫が享受するべき大きな仕合わせの可能性を失うことに

なるでしょう。

私たちは、昭和二十九年に花開いた作品の登場人物たちと同じように、明日を信じて今の苦難に立ち向かわねばなりません。私たちに今できること、もっと改善しうることは、まだまだたくさんあるはずなのです。

春の大会で「真の実践者はいつも上機嫌を失わない」というお話をさせていただきました。皆様は、ご自身を振り返っていかがだったでしょうか。時として不機嫌になることはなかったでしょうか。そして今、どんな逆境にあっても、明日を信じて上機嫌を保っておられるでしょうか。不遇や苦難に苛立って、信念をぐらつかせたりすることはないでしょうか。

昭和二十九年当時、我が会はまだまだ苦難のうちにありました。倫理の大切さを説いても、その日その日の生活に囚われている人たちの耳には、迂遠なこととしか聞こえなかった時代です。しかし、私たちの先達は、そうした苦境にめげることなく、信念を貫き、立派に精進しぬいて成功したのです。

今また長い苦難の時が続いておりますが、そうであればこそなおのこと、先達たちの苦難の時代に学ぼうではありませんか。苦難には前向きに立ち向かうほかに成就の道はないこと。時の風潮に惑わされず、己の信じるところをのみ踏み行なうこと。実践に怠りなきこと。そして、どんな成就も成功も、一瞬もたゆむことなき実践努力の上にのみ築かれるものであることを、再度確認したく思います。

動揺したり迷ったりしている暇があったら、一つの実践を。気づき即行こそ最も効率のよい成就への道であることは、皆様はもう十分におわかりいただいていることと思います。

繰り返します。苦難の時期を打開するには、揺るぎない信念に基づく実践の他にはありません。そしてその実践は、眦を決して力むのではなく、上機嫌の自然体で行ないたいものです。